

「アガベ」(題字・伊藤博胤)

 日本社会事業大学  
Japan College of Social Work

アガベ

日本社会事業大学同窓会北海道支部【(2020年6月10日発行 第28号)】

(事務局=むかわ町穂別80番地10 愛誠会内 0145-45-2455)

## 社会の福祉 誰が任ぞ

何処に行っても、「コロナ」、「コロナ」で、国全体、つまりは国民全体が、息が詰まりそうですし、心も折れてしまいそうな毎日です。

特に、元々暮らしに困っている人たちがコロナ禍に直撃されており、そうであるのに、政権は、「ソナノ、カンケーネ」とでも言うように、「そうした人たちを救おう」、「国民生活の具体的な支援をしよう」とはさらさら思っていないようです。

私たちを顧みれば、確かに、自分たち自身の暮らしだけで精一杯だし、自分たちの関わっている社会福祉現場も先が見えない状態ではあります。

しかし、そうであるが故に、社大生(正しくは「社大同窓生」としては、人々(国民、住民、利用者等)の権利と暮らしを護るために、何か出来ることはないのでしょうか。

北海道同窓会はこれまで、本学同窓会に対して毎年、「同窓会活動の活性化」についての意見具申をしてきました。昨年は、村上会長構想の許、「3+1事業」を提案しました。

このたびは現況の緊急性に鑑み、「現役学生への支援について」、以下のような提案を先月、行ってみました。

- ① 大学として、学生支援の具体的政策を早急に打ち出し、かつ実施すべく、関係機関や政府等に要望を上げてみてはどうか。このことを、同窓会として大学に申し入れてほしい。
- ② 社大生はかつて同様、今も厳しい生活を強いられているだろうから、同窓会として同窓生にカンパ(基金)を募って、学生を直接支援してはどうか。

先にも書いたように、私たち自身の暮らしが揺れ動いているのは事実でしょうけれど、それ以上に大変な思いをしている人たちがいることを考えたとき、「社会の福祉 誰が任ぞ 忘我の愛と 智の灯し 捧げん世紀 来たりけり」の精神で、まずは各々もできることを考え、実践してみてもは如何でしょうか。

私たちに関わる社会福祉現場も、医療現場同様に厳しい状況に直面しています。

そこで、我が道同窓会メンバーの近況とその思いを、以下に報告します(到着順)。

- \* 社大道支部のみなさん、元気での活躍とても嬉しく思います。  
私はその後も、老人らしく過ごしています。  
自動車免許を返納したため、通院の帰りに買い物をしたりするのは、子どもに助けられながらの毎日です。  
道支部の方々、大変な時期ですけれど、さらなるご活躍をお祈りしています。みなさまによろしくお伝えください。(伊藤博胤同窓会顧問)
- \* コロナ対応以外、変わらない毎日だと思います。私は何することも無いのに、時間だけが経っていきます。  
倉田先生の叙勲、今年は難しいかも知れないけど、1月の定期総会か秋季セミナー開催時にお祝いできるとうれいね。アガペでも会員に知らせて下さい。  
社大の改革に向けて、みんなに活躍してもらいたいのので、例えば、大橋先生の人脈で社会福祉の学問的評価を高められる社大系学者や教員との「社大同窓会会議」はできないものでしょうか、と頭を過りました。岩崎同窓会会長のご意見もいただいております。ただ相手は、国・厚労省！だから、やはり「3+1理論」が妥当でしょうかね。  
今後とも、道同窓会なりのビジョンをどんどん打ち出していきましょう！  
私のコロナ自粛期間中の考えながら、頭の片隅に置いてくれると嬉しく思います！  
とにかく、社大生らしく平常心で遣っていきましょう。(村上勝彦さん)
- \* 4月に、法人内の施設職員から新型コロナウイルス陽性者が出て対応に追われました。しかし、現在は落ち着いています。重症化が懸念される高齢者を守るために引き続き頑張っております。  
要介護状態の患者を入院させることに否定的なことから、悲惨なクラスター発生事例がありました。要介護状態の患者の入院先を確保することが、患者本人と周囲の人を守る唯一の方法だと思います。  
第3波が来る前に遣らなければならないことが、まだまだたくさんあります。今後ともさらに奮闘します。(瀬戸雅嗣さん)
- \* 倉田稔先生、おめでとうございます！ でも、祝賀会はしばらくお預けですかね～  
… ( ^ ω ^ ) …  
緊急事態宣言は解除されましたが、コロナの感染はまだ続いていますので、一気にみんな解除するわけにいかず、困ったものです。私は、在宅勤務時間も少しできて、「ひとり親世帯の配食サービス」などのボランティアに参加したり、社会福祉本来の関わりを持つことで、改めて自分自身を振り返る時間になっています。  
やはり、社会福祉を仕事にすることは難しいと実感します。でも、お給料もらわなければ生活もできないです！ もう少し、生活のために定年までは頑張ります：笑  
(白井紀代美さん)
- \* この4月より、勇払郡むかわ町穂別地区にある「社会福祉法人愛誠会」の法人本部に勤務しています。役割としては、事務局次長と就労支援センターの施設長を兼務し

ています。就労支援センターは主にシイタケ栽培とパンの販売及びグループホームの運営をしています。施設長は名ばかりで、職員採用中心に動くつもりではいるものの、新型コロナの影響で苦戦中です。

石狩、厚真、穂別と、毎年住む場所が変わっています。しかし、今度は落ち着くつもりです。なお、道同窓会の事務局も担当しますので、今後とも何とぞよろしく願います。(儀藤敦さん)

\* 携帯故障中で受信不可状態です。お恥ずかしながら、近況としては、「自ず律し一助と」。(佐藤和之さん)

\* 新型コロナウイルスの影響で、利用者さんとの毎年恒例の果物狩りに行けずにとても残念です。しかし、親御さんからの「こんな時なのに、いつもありがとう」という言葉が胸に沁みる毎日です。

早く日常に戻れるように感染予防に努めたいと思います。(松川真子さん)

\* はるにれの里は、コロナ騒動に明け暮れています。社会福祉施設として、いつクラスターになるか日々不安の中で仕事しています。北海道も自粛宣言が廃止され、徐々に感染予防という新しい生活スタイルを常態化するために、すべての道民が意識改革を求められています。幸いにして今のところ、法人では陽性患者を出していません。

その背景には、感染予防の意味が理解ができない200名近くの重度自閉症の方を外出制限等の自粛行動に混乱なく導く職員一人ひとりの懸命の努力があります。

職員に感謝、感謝の限りです。(木村昭一さん)

\* 本年度から会計監査人をAからBに変更(15年もお世話になっているので、なれ合いになると思い、社福に特化した監査法人を選任)したのは良いのですが、半分趣味で生きている公認会計士で、私と同じで小さなことが気にかかる性質の人で困ります。

無限定適正意見の監査報告も、コロナで実査ができませんので、全てデータでのやり取りなのですよ。

そんなわけで、ドタバタと日々を送っています。(岩崎俊雄同窓会会長)

\* 3月でNPO法人の理事長を退任し、4月からは念願の「晴耕雨読の気儘な年金生活者」となりました。規則正しい生活(起床→朝食→畑仕事→読書→軽い運動→昼食→昼寝→散歩→畑仕事→読書→夕食→入浴→読書→就寝…)も身につけてきました。

なお、個人HPも開設しましたので、お時間のあるときにご笑覧ください。(タカダ)  
→ <https://guchokuan.web.fc2.com/>

\* **緊急事態宣言解除後の本学の対応について**(5月26日 日社大学学長 神野直彦)

学生の皆様には、自粛生活を余儀なくされ、様々な困難を感じていることと存じますが、大学としてもこのような中でも皆様の学びの機会を中断することのないよう、通学によらない授業を継続しながら多くの課題に取り組んでいます。

遠隔授業への参加等、慣れない新たな学修様式に戸惑いや不安をお感じの方もいらっしゃると思います。お困りのことや思い悩むことがあれば、決して一人で抱え込まず、ご家族、ご友人等にお話しして、孤立しないように努めていただきたいと思います。本学の教員や学生支援課・学生相談室等に遠慮無くお電話やメール等でご相談ください。

本学ではさらに、学生の皆様の健康と安全の確保を最優先に考えた上で、教育研究活動を継続しながら、創造的な教育研究活動を生み出すための努力を続けています。授業の展開を通して、教員は「コロナ以降のニューノーマル（新しい日常）」に対応する「次世代を切り拓く教育研究」の開発に取り組んでいます。職員は学生の学びをサポートするために、奮闘しています。

5月25日、ついに東京都を含む1都1道3県で緊急事態宣言が解除されました。しかし、新型コロナウイルス感染症の脅威が去るまでは、本学のあらゆる活動は、厳格な感染症拡大防止策を講じた上でなされなければなりません。緊急事態宣言解除後も、密集・密接・密閉の3密を避け、感染防止に努めなければなりません。そのため本学では当面の間、原則として通学によらない授業、大学構内への不要不急の立入禁止、課外活動の禁止を継続します。なお、個別に学部・両大学院からの指示がある場合は、それに従ってください。

キャンパスに学生の皆様の明るい笑い声が一日も早く聞こえる日を目指し準備を進めていることをご理解ください。学生の皆様には多くのご不便をお掛けいたしますが、皆様の大切な命、そして皆様の周りの方の大切な命を守るために、引き続き今しばらくの間、安全に配慮した思慮深い行動をお願いいたします。

【社会福祉随想リレー】

## 発達障害のある人への支援と自分について

～大学時代から今に至るまで・その2～

学部第57年卒(札幌市自閉症・発達障害支援センターおがる)

塚本 由希乃

半年ほど期間が空いてしまいましたが、前回の続きから書いていきたいと思います。

日本社会事業大学を卒業し、東京で4年働き、北海道へ戻ったのが、2012年3月です。この章では、大学院時代の経験話になるものの、大学院時代の経験や記憶についてはこれまで整理したことはなく、書きながら思い出し整理していく形になります。

無事に北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座に入学します。専門は、児童・思春期の発達障害のある人への支援でした。この専門の選択は、大学院進学のかっけとしては、肢体不自由の人の支援ではあったものの、これから先、仕事を続けていくに当たって、就職時の念頭にあった発達障害の支援に主軸を戻そうと考えたためです。大きく分けたときの支援対象は異なるものの、「支援や発達」というキーでは一緒であり、かっけにあった問題意識（「その1」参照）も整理できるのではと考えました。

大学院の2年間は、思う以上に忙しかったけれど、反面、学んだ内容は大変有意義で、

文字通り現在の仕事の糧になっています。心理学の観点から、社会福祉現場での直接支援を学び直すということは、感覚的に行ってきた部分もある支援について、その意味付けやキーワード化なのだと思います。それまでは“大事な気がするけれど、何気なく行っていた行動や言動”も、その意味づけやキーワード化ができていくことで、より多くの人と共有できる言語に変わりました。整理が出来ればできるほど、共有できる量としても増えていくのだということを当時、考えた記憶があります。それを増やすことは、時間や労力を必要とすることでもあり、一方で、支援職という業種においては、今現在もとても大事で、興味深く思っていることです。

大学院では、主に発達障害の児童期・思春期の子どもたちを相手に個別セラピーを行ったり、グループセラピー（活動）を行いました。当時、大学に親御さんと相談に来る子どもたちは、知的障害はなく、通常級に在籍している子どもがほとんどでした。ただ、通常級という環境の中で、周りの子とうまくやれずトラブルが起きやすかったり、学校というルールの中で動くということが苦手だったりなど、学校という環境に適応しにくく辛くなっているという子たちでした。一人ひとりの困りごととしては、“頭ではわかっているのだけど、できない”、“クラスの子と仲良くしたいのに、何故かうまくいかない”、“勉強はできるのに、友だちの話すスピードについていられない”などでした。

よく「発達障害とはどういう状態か？」を説明する時に、得意なことと不得意なことの差がある、発達の仕方が凸凹である、と表現することがあるかと思います。彼らも、似た困りごとを持っていました。できる部分はできるからこそ、自分も周囲も理解がしにくく、支援にたどり着くまでに時間がかかり、何だか疲れ切っている子もいました。一見すると、“彼らがわからないこと”がわかりにくいのが発達障害の傾向のある人の一つの特徴だと思います。

彼らを前にして、まずは、支援するときには、彼らが何がわかりにくいのか、何故わからないのかなどを知るために、アセスメントをするという過程がとても重要であることを知りました。そして、わかりにくいと感じれば感じるほど、自分の感覚や経験則だけに頼ったアセスメントをしてしまうと、精査という意味では、情報が不足してしまう事があるのだと気づかされます。数種の心理検査を活用したり、人間関係も含めどんな経験をして、そこでどんな学びをしてきたのか（勉強という意味だけではなく、生活や対人関係のことも）、情報を聴き取ったりし、整理していくことがとても重要で、そこが支援のスタート地点なのだと学んでいきます。

そして、当然でありながら忘れがちなのが、本人が求めていることに気づくことなのだと思います。

当時、いつも大人に反発したり、声かけによってパニックを起こしたりする小学校高学年の男の子を担当しました。学校では、担任の先生が「もう、どう対応したら良いかわからない」と嘆いていました。ただ、関わっているうちに、彼は、本当はとても学校に行きたくて自分でも困っているのだ、ということがわかってきます。相談室に来室してからは、先のアセスメントで本人の特性を整理し、それに応じた支援を考えました。

彼は、どんどん学びを吸収し、結果、学校に行けるようになりました。本人の“本当は学校に行きたい気持ち”が本人の中にあったことがあり、そして、アセスメント情報をもとに組み立てた支援も届きやすかった部分が後押ししたのではないかと思っています。「登

校は難しいだろう」と言われていた子でしたので、私も驚きと感動をした記憶があります。

事例を通した学びからも、様々な観点で相手の情報を収集し相手に届きやすい工夫をしていくこと、そして、先に、本人は必要としているのか？という観点で見してみる事もとても重要であると改めて感じます。

今となっては、教えていると思っけていても伝わっていないように感じた、肢体不自由の人の支援は、このアセスメントや支援のアイデアがずれていたり、不足していたのではないか。またそれ以前に彼らが本当に知りたいと思っていることを教えていたのだろうか、と反省する部分がたくさんあります。

その人に対するわからなさが大きいほど、アセスメントを取り、情報を集めなければいけないこと、それに応じて、教え方も、また教える必要性があるのかということについても、個別に吟味していくことが必要であるということに気づき、整理されていった過程でした。

今回、大学院に入ったきっかけであった肢体不自由の人の支援における問題意識が、こういうプロセスで埋まっていったのだ、と少し客観的に整理することができました。

大学院の最後には、修士論文の提出がありました。修士論文では、先に書いた、発達障害の傾向のある児童期の子どもたちを対象に、グループ活動の経過とその結果をまとめました。この修士論文の作成は、自分が大学院で行った支援を一つひとつ整理することでもあり、さらには、支援を自分と相手だけで完結するのではなく、社会とも共有できるように言語化していく過程でもありました。振り返ってみると、この修論作成も、私が大学院に入ったきっかけのまとめとして、答えてくれるものの一つだったのかと思います。大変な面はありました。しかしとても有意義でしたし、今の自分にはなくてはならないプロセスだったのです。

ここが2014年3月ですので、この後の6年は、はるにれの里で勤務をしています。

前回書いた、「その1」が自分が仕事をしていくキャリアのきっかけだとするならば、「その2」で知識を増やし、「その3」で知識を元に実践していくという流れになるかと思ひます。次号「その3」では、現在の仕事のご紹介ができれば良い、と思ひています！

## 倉田稔先生 瑞宝中綬章を受章

社大で、1974年3月まで経済学の教鞭を執り、その後、小樽商大に異動して、図書館長などを務めた倉田稔先生（現・商大名譽教授）が、今春の叙勲で標記を受章されました。大変、おめでとうござひます。

先生の専門は、社会思想史であり、小樽では小林多喜二の研究者としても有名です。息の長い研究こそが、倉田先生の身上です。

本来ならば、すぐに祝賀会を催すべきでしょうけれど、このような状況ゆえ、「一段落」ついた時点で、再考したいと思ひます…。

倉田先生、暫しお待ちあれ！